

ふるさとの苦家

佐藤 志郎 (千葉・茨城公団住宅自治会協議会・袖ヶ浦団地自治会事務局長)

集合住宅を考える

住宅・都市整備公団の前身、(財)同潤会アパートが示した、香り高い文化と住哲学・理念を復興させる運動が、いまこそ集合住宅には必要なのだ。

人間にとって何が大切かといえば、生命の安全と心身の健康、仕事を通じた人間らしい暮らし、家庭の幸せ、そして平和以上のものはないでしょう。

住まいは、これら全てを支える基本的な存在です。住居が貧しい状態にあれば、健康も家庭の幸福も得ることができないのではないのでしょうか。

それにもかかわらず、永年に亘って日本人は、劣悪な住居を強いられてきました。歴史的にずっと溯って考えてみると、現代でもその残滓がかなり濃厚に見られますが、住居をただの「ねぐら」と考える見方が、日本人には強かったように思われます。

鴨長明が「日野の里」に設けた方丈の家は、世捨て人の住居ですが、3帖角で充分でした。

人生そのものも儂い浮世で、住居は仮の宿、ただ寝だけのスペースさえあればいいと言う、堅穴の原始住居はもとより、畳を敷くようになって、「起きて半畳、寝て一畳」で十分だという禅宗的思想が根底に見られます。

住居の安さを求めぬという武士道もしかり、江戸時代の大多数の庶民の住んだ裏長屋は、土間を入れて六尺二間(10㎡)の「ねぐら」でした。

これが綿々と続いて戦時中は、粗末な住居こそ困苦欠乏に耐え、強健な民族を養うものだと、耐乏生活が美德として賛美されました。

このように明治以来の近代社会、第二次大戦後の民主主義社会になっても、国民の住まいは貧しいままに放置されてきました。

時の為政者がほとんど何も取り組んでこなかったというだけでなく、国民自身もまた「ねぐら」住居に不満を持たない仏教的諦観に慣らされ、豊かな住居への欲求を持つことさえ削がれてきたと言うのは言い過ぎでしょうか。

住宅・都市整備公団、公営・民間の集合住宅も言ってみれば、江戸時代の裏長屋の延長線上でしかありえないということもできます。

戦後の大多数の都市住民の抱えている大きな夢は、「庭つき一戸建て」で、バブル崩壊によって実現がかなり難しくなったとは言え、現在もほとんど変わらない欲求であるようです。

都市住民とは言っても、先祖を辿れば、いや子どもの時分は田舎や農村で暮らしていたという人が多いから、庭つきという願望には、失われつつある農村と自然に対する哀しいまでの郷愁が込められていると言ってもよいでしょう。

四季の変化に富む日本の風土は、自然に接した開放的な住宅を創りだし、住居には自然を真近に感じさせる庭一という、日本人の伝統的な感性が濃厚に生きている証左と言えます。

「庭つき一戸建て」対極概念としての集合住宅も、現在では総戸数924万戸にのぼり、日本全住戸数の23%に達しています。

特に首都圏（東京・千葉・埼玉・神奈川県）では約32%、京阪神（大阪・京都・兵庫）では約40%の比率を占めるまでになっています。

これらの鉄筋コンクリート造の集合住宅は第二次大戦後に急速に普及しました。第二次大戦によって日本各地の都市では多くの住宅が焼失・破壊されました。東京と大阪だけでも、焼失した住宅は100万戸を超えています。また八王子市や福井市のように90%を超える住宅を失った地方都市もあります。

その結果、日本全国の焼失家屋は265万戸を超え、加えて外地からの引き揚げ者による人口増加や前述したような、戦時中の住宅供給不足などが重なり、終戦直後には420万戸の住宅が不足していたと言われています。

住宅不足にさらに追い討ちをかけたのが、都市への人口集中でした。戦後の経済復興の中心となった都市には、地方から陸続と人がなだれこみ、その人たちの住宅を確保することも急務となりました。

こうした状況を打開する方法として採用されたのが集合住宅による住まいの建設でした。

日本住宅公団（現：住宅・都市整備公団）や自治体、民間による集合住宅の建設が急ピッチで進められ、愛知県春日井市の高蔵寺ニュータウンを第一号として、千里ニュータウンや東京多摩ニュータウンのような大規模団地が、日本各地に誕生しました。

しかしながら現代の集合住宅には、住宅不足の解消という歴史的な経緯を踏まえながらも、住まいとしての基本的な役割のほかに、これまでのような「高・速・狭」に代表されるようなマイナスイメージを払拭し、住宅の質的向上と「まち、そしてふるさと、にふさわしい環境を創造する」という、重要な社会的使命が課せられていることを痛感させられます。

では現在のような集合住宅は一体いつ頃から日本には登場したのでしょうか。

日本に鉄筋コンクリートの技術が紹介されたのは1890年代後半（明治20年代末）、一般家族向け

の不燃構造の集合住宅が建設されるようになったのは、1920年代（大正9年）で、それまでは橋や倉庫、オフィス、会社の社宅や寮等にこの技術が試され、蓄積されてきました。

1921年～1922年（大正10年～11年）東京市が、下町に鉄筋ブロック造の市営アパートを建てたのが初めて記録されています。

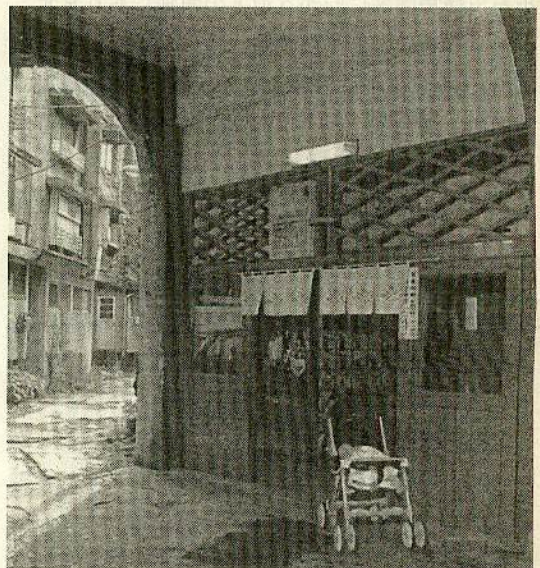
1923年（大正12年）、首都東京を壊滅させた関東大震災の体験は、不燃・耐震構造の集合住宅建設を切望させることになりました。

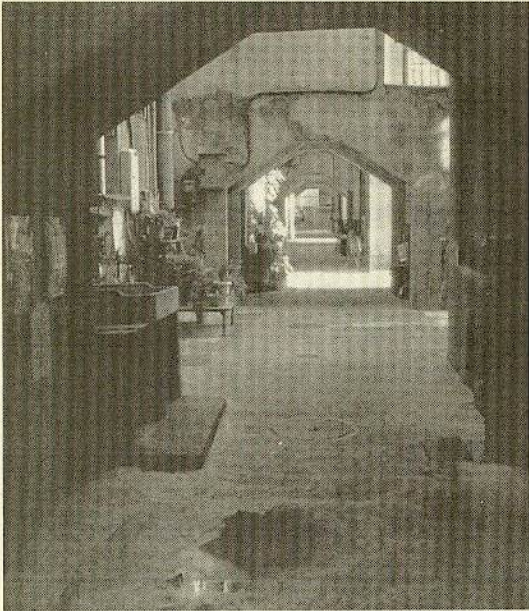
同潤会アパートメント

そこには、人間の住む集合住宅があった

この時公的な使命をもって集合住宅の供給に当たったのが、大正14年に設立された（助）同潤会（その後、住宅営団から日本住宅公団そして現在の住・都公団へ）でした。

（助）同潤会は東京の青山や横浜等の都市部に鉄筋コンクリートの集合住宅（アパートメント）を次々と建設しました。同潤会のアパートメントは、建物の中に共同の食堂や売店、浴場をもっており、当時としては極めて画期的な内容でした（代表例：代官山アパートの文化湯）。





1932年（昭和7年）には中流向け集合住宅として建てられた江戸川アパートには、驚くべきことに、エレベーターのほかに蒸気暖房と電話さえついていたのです。

近時、時代の先端を行くかのように、女性専用のマンション等が脚光を浴びていますが、既にこの時代に独身者用に、男子には春日町に、女子には大塚に女子アパートが建てられたのです。

この同潤会女子アパートは東京教育大学跡地、小石川植物園等に向かう道との角地にあります。

地上5階建て、一部6階、地下1階で、中庭を囲み150室、ほかに管理人室、応接間、協同浴室、洗面所、集会室、シャワー室、ピアノ室（当時は備え付けのピアノがあったという）等、ちょっとしたコミュニケーション、新しいまち、がそこには厳存しています。

これらアパートメントの設備は洋式でしたが、室内は日本人の生活を考慮して畳敷きの部屋を基本としていて、多くの日本人に歓迎され、老朽化したとはいえ、その一部は現在も健在です。

これらの集合住宅に触れる時、わずかに15年しかなかったとは言え、大正ロマンの得も言われぬ香り高い文化遺産と、集合住宅を建設した人々の明確な住哲学、人間が生活する住空間の確立という

理念の崇高さには驚くばかりです。

現在の集合住宅にはなぜこのような時代を大きく凌駕した、住文化と住理念が欠落してしまったのでしょうか、喪失したものの大きさにいまさらながら愕然としてしまいます。

住む人の生活の息吹きと夢と希望が感じられる住宅、町としてまたふるさととして感慨できる集合住宅を復興することの大事さに、いまさらながら気をつけさせられるのです。

高齢社会に突入した現代の公団集合住宅にとって、旧同潤会アパートの建物と住人の老化は他人事には思えないのです。

集合住宅に住み集う人々の30年以上に亘る、住環境整備とコミュニティ創造のために営々として蓄えられたマグマが、人間の創造と復活を希求する労働者協同組合や、高齢者協同組合という新たな運動を媒介として、活火山として再生されるべきであるし、それは十分に可能な展望のように思えるのです。

なにしろ公団の集合住宅は私たち団地居住者が守り育てた「ふるさと」にほかならないからなのです。住文化のルネッサンスが華開くとき、そこには総合福祉住宅という、人類が初めて出会う高齢社会での人権擁護の新たな住哲学が確立され、集合住宅は初めて「ふるさとの苦家」として心に定住できるのでしょうか。